

「日本語力」と「教科に関する力」の習得状況を把握する

教科指導型日本語指導とは

☆学習言語の習得を促し、教科の学習理解を支援する指導法である。

☆日本語を母語としない児童生徒だけでなく、学習言語の習得が必要なすべての児童生徒を対象にする。

☆学習言語力の向上を学力の向上に結び付けていくことをねらいにしている（日本語力の向上のみを目的とする指導法ではない）。

☆日本語力に応じた教科学習を行うのではなく、教科学習に必要な日本語力の育成を図る（日本語力に応じて、教科の学習内容を減らしたり、難易度を下げたりするのではなく、教科学習に必要な日本語が、当該学年の量・難易度のままで理解できるように、教師の側が「わかるための」工夫をする）。

学力向上のために不可欠な支援とは

1. 教科書や教師の説明の中に出てくる日本語（教科語彙）の意味がわかり、使えるようになるための支援

⇒ 1-1 どの日本語を知っているのか・知らないのかを考える → 児童生徒の実態把握（日本語習得状況）

1-2 どの日本語を重点的に教える必要があるのかを考える → 「日本語の目標」の設定

1-3 「日本語の目標」を達成するための方法を考える → 理解支援・表現支援・記憶支援の工夫

2. 未習や未定着内容を補うとともに、新出内容の確実な理解を図るための支援

⇒ 2-1 （日本では）既習なのに未習や未定着の内容があるのかを考える → 児童生徒の実態把握（教科に関する力）

2-2 未習や未定着になっている内容をどのように補っていくのかを考える → 国際教室と在籍学級の役割分担

2-3 新出の内容が本単元・本時で確実に理解できるための方法を考える → 「ターゲットセンテンス」の設定

【手だて1-1】【手だて2-1】指導に役立つ「実態把握」を行う

・「日本語習得状況」を見れば、本単元の学習を進める上で、生活言語上や学習言語上でどのような支援をする必要があるのかがわかるように書く（自分で何ができて何ができないのか、どこに教師の支援が必要なのかを書く）。

・「教科に関する力」を見れば、本単元の学習を進める上で、未習・未定着内容の有無、母国での学習経験の有無、本教科に必要な学習スキルの習得状況がわかるように書く（教科学習上で不足している知識や経験を書く）。

例) 第2学年算数科「分けた大きさをあらわそう」(国際教室)

対象児童	母語(出身国)	日本語習得状況	算数科に関する力
A	スペイン語(ペルー)	・市内の保育園を卒園しているが、休みがちであった。小学校には、日本語が話せない状態で入学した。 ・日常会話は分かる語彙が少なく、聞ける内容が限られていて、早い会話は聞き取れないが、時間をかければ、ゆっくり話すことができる。	・計算速度、正確さ、文章理解ともに難しい部分が多い。不等号などは、動作化や簡単な内容にすれば理解している。足し算や引き算は、繰り上がり・繰り下がりがなければ計算できる。

例) 第3学年家庭科「幼児にふさわしいおやつを考えよう！」(在籍学級)

対象生徒	母語(出身国)	日本語習得状況	家庭科に関する力
A	タガログ語(フィリピン)	・4歳のときに来日。小学4年生から学校に通い始め、ひらがな・カタカナ、算数の九九や読書など家庭学習のみであった。日常生活の日本語の読み書きは問題ない。作文も自分の力で書ける。母語での学習期間がなく日本語での学習期間が長いので、読み書きは母語よりも日本語のほうを得意としている。	・幼少期を母国または家庭のみで過ごしたため、日本の「幼児のおやつ」に関するスキルは少ない。

児童生徒の「実態把握」を行うときの留意点

・本単元の学習に関する既習語彙の習得状況も把握できると良い（語彙量の実態把握が必要）。

・「実態把握」を行わないと、学力向上につながる「日本語の目標」が設定できない。習得済や学年不相应の易しい日本語を目標に挙げたり、表現の幅が広がるような語彙量を増やすための日本語を目標に挙げなかったりする。

・「日本語習得状況」や「教科に関する力」で児童生徒にとって習得が十分でない部分を書いたなら、それを国際教室の学習で補うのか、在籍学級の学習で補うのか、家庭学習で補うのか、放課後学習で補うのかも同時に考える（「実態把握」は、学力向上の妨げになる要因を明らかにし、それを取り除く方法を考えるために行うものだから、「十分でない」部分が改善されるための具体的な支援内容が、「単元の指導」の中に表れてくる必要がある）。

「日本語の目標」を設定して学習言語の習得を図る

【手だて1-2】「日本語の目標」を設定する

「どの日本語を重点的に教える必要があるのか？」

→ 本時の教科の学習をする上で、

①その単語・文章の意味がわからないと、教科の学習内容が理解できないという、

そういう日本語（単語・文章）の意味を理解させるために、

日本語の目標 ア を設定

②その単語・文章を知らないと、教科の学習活動に参加できないという、

そういう日本語（単語・文章）を習得させるために、

日本語の目標 イ・ウ を設定

日本語の目標..ア

「本時の教科語彙（新出語や難語）の意味がわかる」

例) 第2学年算数科「三角形と四角形」

- ・直線、辺、頂点、直角などの用語を正しく使えるようにする。
- ・三角形、四角形、長方形、正方形、直角三角形の定義や性質を理解し、用語を覚える。
- ・「なかまに分ける」「かこまれている」「かど」「むかい合っている」の意味を理解できるようにする。

例) 第1学年理科「エネルギー 音による現象」

- ・「振幅」の学習用語を理解する。
- ・音の「大きい」「小さい」「高い」「低い」の意味がわかる。

例) 第1学年国語科「ダイコンは大きな根？」

- ・「問題提起」「説明・解説」「根拠」など、説明文を学習するときに必要な語句が理解できる。

例) 第1学年社会科「古代までの日本～日本の原始時代」

- ・「まつりごと」「したがえる」「身分」「同盟」「おさめる」など、歴史を学ぶ上で必要なことばの意味がわかる。

日本語の目標..イ

「ある表現を習得して、自分の意見や思考過程を、言うことができる/書くことができる」

例) 第4学年国語科「こんぎつね」

- ・手がかりになる言葉を見つけ、「〇〇〇という言葉から、□□□な気持ちかわかる。」という表現を使用して、自分の意見を発表する。

例) 第5学年算数科「図形の角を調べよう」

- ・「三角形が□個だから」を使って、多角形の内角の和の求め方を説明できる。

日本語の目標..ウ

「語彙を増やす（表現力を育てる）」

例) 第6学年国語科「ものを見方を広げよう」

- ・次の言葉を使って、絵から読み取ったことを文章にすることができる。
 - ・伝わってくる ・印象を受ける ・表れている
 - ・～ではないか ・～かもしれない ・～にちがいない
 - ・～としか思えない ・～せずにはいられない
 - ・なんと～で…なことだろう
 - ・きっとこれは～なのではないか

「日本語の目標」を設定するときの留意点

- ・授業は日本語で行われており、毎時間必ず、児童生徒がわからないor知らない日本語は登場する。そのため、毎時間の授業で必ず、「日本語の目標」ア～ウのいずれかを設定する（指導案にも、ア～ウのいずれを設定したのかを明記すると良い。「教科の目標」達成に不可欠かどうかで、どの日本語を目標にするか否か、取捨選択する。
- ・「日本語の目標」では、習得させたい言葉を具体的に示す。「自分の言葉で感想を言えるようになる」のような抽象的な書き方をしない。どんな言葉が習得できたのか、そのために教師がどんな工夫をしたのかを評価できない。
- ・学年相応の難易度に設定する（授業中に使用するからといって、下学年で学習済の表現を、いつまでも「日本語の目標」の中に書かない）。習得すべき学習言語の難易度を下げない。
- ・難易度を下げなくても学習言語の習得ができるように、授業中に理解支援・表現支援・記憶支援を必ず入れる。
- ・児童生徒が1つの表現を覚えたなら、異なる表現を教えて語彙量を増やす（「日本語の目標ウ」の積極的な設定）。
- ・“いかにも”教科語彙という、見た目でわかりやすいもの以外にも、教師が見落としやすい教科語彙があることに注意する（例：「様子」「特徴」「性質」）。児童生徒にとっては、“なんとなく”知っている程度かもしれないし、教科によって意味も異なるので、その言葉はその教科で使用するときの正確な意味や使い方を教える必要がある。
- ・日常生活で使うとき（生活言語）と教科学習で使うとき（学習言語）に、意味が異なる教科語彙があることに注意する（例：音が「大きい」・「高い」、背が「大きい」・「高い」）。生活言語として意味を知っていることが、学習言語として意味を知っていることにはならない。その教科で使用するときの正確な意味を教える必要がある。

ターゲットセンテンスを設定して教科内容の理解を図る

【手だて2-3】「ターゲットセンテンス」を意識する

「新出の内容が本単元・本時で確実に理解できるための方法は？」

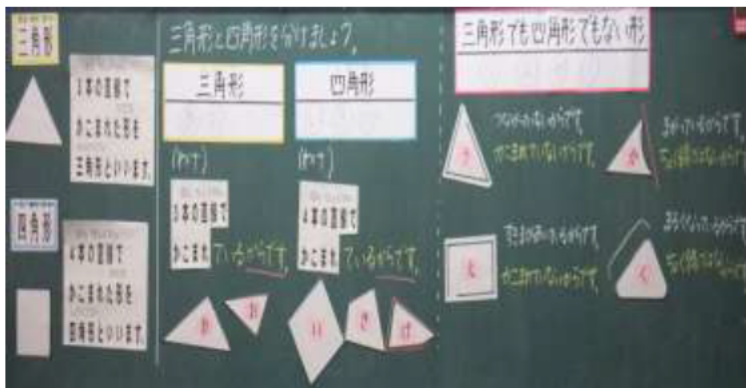
→ 本時の教科の学習をする上で、

- ①「教科の目標」が達成できるように、児童生徒の思考を意図的にある方向に導くために、
- ②最も重要な学習内容がどこのかが、児童生徒にははっきりとわかるために、

教師は「思考の手がかりとなる表現」(ターゲットセンテンス)を意識して、授業中に繰り返し使用する

「思考の手がかりとなる表現」(ターゲットセンテンス)

例) 第2学年算数科「三角形と四角形」



<算数科の目標>

- ・定義に基づいて、三角形と四角形の弁別をすることができる。

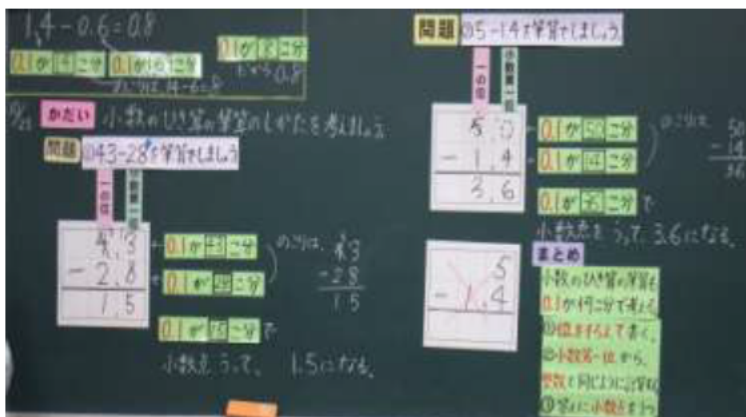
<日本語の目標>

- ・図形を見て、「三角形」「四角形」という名前が言える。
- ・「直線」「囲まれている」などの意味を理解し、図形を弁別することができる。

<ターゲットセンテンス>

- ・「なぜ、〇は三角形(四角形)ですか。」
- ・「なぜ、〇は三角形でも四角形でもないのですか。」

例) 第3学年算数科「はしたの大きさの表し方を考えよう」



<算数科の目標>

- ・小数第一位までの小数の減法の筆算の仕方を理解し、計算することができる。

<日本語の目標>

- ・「位をそろえる」「小数点をうつ」の学習用語を使うことができる。

<ターゲットセンテンス>

- ・「〇は、0.1が()分です(か)。」

「ターゲットセンテンス」を設定するときの留意点

- ・「ターゲットセンテンス」は、本時の「教科の目標」の達成に役立たないといけない。「ターゲットセンテンス」は、本時の達成すべき「教科の目標」を教師が理解していないと、設定することができない(教材研究が不可欠)。
- ・「ターゲットセンテンス」の役割は、日本語力や教科に関する力の習得が十分でない児童生徒でも、「本時の最も重要な学習内容」が何かかわかるようにすること。そのため、「ターゲットセンテンス」を見れば、「本時の最も重要な学習内容」が推測できるはず(あるセンテンスを見ても、「本時の最も重要な学習内容」が推測できなければ、そのセンテンスは「ターゲットセンテンス」ではない。設定を失敗している)。
- ・「児童生徒の思考を意図的にある方向に導く」ためには、教師は「ターゲットセンテンス」を使って、何度も質問したり答えさせたりすることになる。「ターゲットセンテンス」は、本時の最も重要な学習内容を意識させるためのものなので、そのセンテンスを使用して児童生徒が答える場面も当然出てくる。だからといって、「ターゲットセンテンス」は、どの教科・単元でも通用するような汎用性のある話型を意味するのではない。あくまでも、「本時の最も重要な学習内容」の理解を促すためのもの。児童生徒の解答用の話型ではない)。
- ・本時の最も重要な学習内容が児童生徒に「はっきりわかる」ためには、「ターゲットセンテンス」は、板書や発問の中に何度も登場することになる(何度も登場しない場合、それは「ターゲットセンテンス」ではない)。